WBC の現状と MLB の戦略に関する考察

WBC games and MLB's scouting strategy

1K09B208-9　矢野周平
主査 武藤泰明 先生　　副査 間野義之先生

【目的】

オリンピックから野球が正式種目から外されてしまった現在、唯一国際大会として存在しているのがワールドベースボールクラシックである。これまで三回大会が行われてきたが、開催にあたって数々の課題点が浮き彫りになってきているのも事実である。今回 WBC を題材にして論文を執筆しようと思ったきっかけは、私がアメリカ留学中に、WBC に対するアメリカ国民の意識の低さを実感したからである。私が所属していた現地の野球チームでは、WBC のシーズンになっても関連する話題が一切でてこなかったうえに、こちらからその話題をふっても反応が非常に薄かった。また日本では WBC シーズンになれば民放キー曲などで日本代表の試合を全試合放映するが、アメリカでは MLB のスプリングトレーニングやカレッジスポーツに関する報道ばかりで、WBC に関する情報をテレビで目にすることはあまりなかった。私はこの日米間での国際大会に対する温度差に疑問を感じ、こうした現状の背景にはどんな理由があるのかということを追求したいと思い、この論文を執筆するに至った。

【方法】

文献としての資料が少なかったため、基本的にはインターネット上の関連情報から資料を集めた。それぞれの年度の大会ごとのルールや、大会における視聴率などのデータを集め、そこから浮かび上がる問題点について考察した。さらに WBC に関して全権を握っている MLB という組織そのものについての概要も知ることで、WBC を通した組織の戦略についても自らの考えも交えながら考えることにした。

【結果】

歴史がまだまだ浅い大会ではあるが、同一カードの繰り返しや球数制限といったルール作りという点においてこれから改善の余地があるということが分かった。また表向きでは真の世界一を決める国際大会を、というコンセプトのもと開催されている WBC ではあるが、実際は MLB にとっての公開トライアウトの場でしかないということが今回調査を進める上で明らかになった。さらに MLB が大会を牛耳る形になってしまっている現状に関しては。今後 NPB をはじめとした他の野球組織が MLB と同等またはそれ以上の力をつけない限り、平等な大会運営を行うことは不可能であるという結論に至った。さらに MLB の視点に立って考えた場合、今後 NBA のように未開拓のマーケットを拡大しダイヤの原石を発掘すること、それが現実的に見た野球の国際化のための近道であるという意見をもう一つの結論として導きだした。

【考察及びまとめ】

第１章では、本論文の主張と展開について説明する。第２章では、第１回大会からのルールの変遷及び大会の歴史、日本代表チームが参加決定にいたるまでといった内容に踏み込む。第３章では、大会の抱える問題点を、視聴率の日米間の比較、有力選手の出場辞退といった点に触れながら考察した。第４章では、WBC の主催者である MLB の内情及びビジネスモデルについて考察し、NBA のビジネスモデルを例に挙げながら、今後、WBC をどのような場として発展させていくべきか、ということを MLB 視点に立って考えた。最後に第５章では、第４章までの内容をもとに、WBC のあり方について自分自身の結論を述べた。

研究を始めた当初は、WBC はサッカーワールドカップのような、国際的に注目度の高いビッグイベントとなっていくことが理想的であると考えていたものの、実際にそういった位置づけの大会にしていくということは、野球という競技そのものの競技人口、また MLB 以外の野球組織の規模などの観点から、結局はメジャーリーガーの品評会及び各国代表チームからの選手発掘の場に重きを置く大会にならざるを得ないということが明らかになった。またアジアの強豪国など一部の国以外の選手たちにとって世界一のリーグは MLB であり、メジャーリーガーになることこそすべてであるといった考えが定着している限り、MLB 主導の大会組織の構図は変わることはないし、アメリカ代表チームの例で明らかなように、国の威信をかけてと戦うといった意識が高まることは見込めないだろう。